

次期体操競技界を担う選手

岡崎秀人・藤本 俊・新井重信

●要約

本研究は、次期体操競技界を担うであろう一人の若い選手に注目し、現在の演技構成を分析することで北京オリンピック以後の日本選手の可能性を探り、今後の強化策の一助とすることを目的とした。

その結果、ゆかの演技においては、既に世界のトップクラスに肩を並べるレベルにありメダルを狙える位置にいること、あん馬、跳馬、平行棒、鉄棒の演技においては、若干難度を引き上げ、実施面においても姿勢的、技術的に意識し安定した演技を心掛ける必要があること、つり輪の演技においては、世界の選手たちと比較すると現時点でA得点には大きな差があることが明らかとなり、その差を少しでも縮めるために演技価値点としてカウントされる技の難度を上げつつ体力強化を含めたトレーニングが必須の課題であることが明らかとなった。

また、若い選手たちにおいては早期に課題を見出し長期的な視野に立った育成・強化の体制が望まれる。

●キーワード

男子体操競技

ポスト北京2008

演技構成

育成・強化

はじめに

2008年の8月8日から8月24日までの期間に開催が予定されている第29回オリンピック北京大会(以下、北京オリンピックという。)は、人権問題や大気(環境)汚染による選手への悪影響など様々な問題が懸念(注1)されているが、おそらく中国(中華人民共和国)は国家の威信をかけて開催するであろう。

開催まで1年を切った現在、日本の各競技種目団体は北京オリンピックに向けての対策を練り、選手の強化を行っている。なかでも男子体操競技は、メダルの獲得が期待される有力な競技種目の一つであり、現在、国際大会における経験、実績が豊富な富田選手、水鳥選手をはじめ、オリンピック日本代表候補選手達は、団体総合、個人総合、種目別選手権においてメダル獲得のために日々練習に励んでいる。

その中で筆者は、北京オリンピックにおいても有力な候補選手であることはもとより、2012年第30回オリンピックロンドン大会においては日本のエースとして活躍が予想される若い選手に注目している。

I 研究の目的

我が国の体操競技界としては、北京オリンピックにおける日本選手の活躍を期待し、短期的な目標に向けての強化を図ると同時に、それ以後の大会を見据えた長期的な視野に立った若手選手の育成、強化も重要な課題である。

本研究は、次期体操競技界を担うであろう一人の若い選手に注目し、その選手が実施している現在の各演技を分析、考察することで北京オリンピック以後の日本選手の可能性を探り、強化策の一助とすることを目的とする。

II 方法

1. 対象及び競技歴

対象は、U.K 選手。1989年(昭和64年)1月生まれで現在大学1年生。2006年には高校選抜および全日本ジュニア選手権大会を制し、同年11月に開催された全日本体操競技選手権大会においては、高校生ながら個人総合で8位に入りナショナルメンバー入りを果している。2007年には第24回ユニバーシアード大会(バンコク:タイ)のメンバーとなり、団体、種目別選手権(ゆか)の金メダルと跳馬で銅メダルを獲得している。また、同年9月に開催された第61回全日本学生体操競技選手権大会においては1年生ながら個人総合優勝を果している。

2. 演技の分析

本研究では、以下の大会で優勝した際の演技(6種目)を、筆者がビデオカメラで観客席より撮影した映像資料をもとに、各種目の演技ごとに難度、要求グループ、終末技、加点、実施技、演技価値点としてカウントされる技の難度とその数、A得点、B得点について一覧表を作成し検討資料とした。また、財)日本体操協会より購入した2007年に行なわれたNHK杯のDVD映像にある演技内容との違いを検証し、今後の可能性を探るための考察を行った。

大会名：第61回全日本学生体操競技選手権大会 個人総合決勝（以下、全日本インカレという。）

期 日：2007年 9月17日

場 所：福岡県北九州市立総合体育館

検証のために用いたDVD映像は以下のとおりである。

大会名：第46回NHK杯 兼 第40回世界体操競技選手権大会日本代表決定競技会 兼 第24回ユニバーシアード競技大会日本代表決定競技会 2日目（以下、代表決定競技会という。）

期 日：2007年 6月10日

表1 ゆかの演技構成

場 所：千葉ポートアリーナ

演技順	技 名	難度	RG	加点			
1	ロンダード+後方伸身宙返り 3/2 ひねり	C	III	0.2			
2	前方伸身宙返り 5/2 ひねり	E	II				
3	前方かかえ込み宙返り 正面伏臥	B	II	0.1			
4	ロンダード+後方とび	A	III				
5	後方伸身宙返り 5/2 ひねり	D	III	0.1			
6	前方かかえ込み宙返り 1回ひねり	C	II				
7	前方伸身宙返り 3/2 ひねり	C	II	0.1			
8	ロンダード+後方とび	—					
9	後ろとびひねり 前方屈身 2回宙返りひねり	E	IV				
10	下向き転向 1080°	C	I				
11	ロンダード+後方とび	—					
12	後方伸身宙返り 2回ひねり	C	III	0.1			
13	前方かかえ込み宙返り 転	C	II				
14	ロンダード+後方とび	—					
終末技	後方伸身宙返り 3回ひねり	D	III				
難 度	A B C D E F	難度点	RG	加点	A 得点	B 得点	決定点
演技技数	1 1 6 2 2	3.6	2.5	0.6	6.7	9.10	15.800
カウント技数							

Ⅲ 結果

1. ゆか

表1は、全日本インカレで実施されたゆかの実施技、加点、技数、演技価値点としてカウントされる技の難度とその数、A得点、B得点、決定点を一覧にしたものである。

演技では15の技を実施し演技価値点としてカウントされる10技の難度とその数は、難度の高い方から2E 2D 6Cとなり難度点は3.6点となり、要求グループ（以下、RGと記す。）は全てを満たしているので2.5点となる。加点は、「後

方伸身宙返り3/2ひねり」+「前方伸身宙返り5/2ひねり」+「前方かかえ込み宙返り 正面伏臥」を実施し、難度で表記するとC+E+Bとなり「C+E」で0.2点、「E+B」で0.1点とこのシリーズで0.3点の組み合わせ加点を得、次に「後方伸身宙返り5/2ひねり」+「前方かかえ込み宙返り 1回ひねり」+「前方伸身宙返り3/2ひねり」を実施し、難度はD+C+Cとなり「D+C」で0.1点、「C+C」で0.1点とこのシリーズで0.2点の組み合わせ加点を得ている。また、「後方伸身宙返り 2回ひねり」+「前方かかえ込み宙返り 転」を実施し、「C+C」で0.1点の加点を得、合計で0.6点の加点を得ている。以上、難度点、RG、加点を合わせたA得点は6.7点という結果であった（注2）。

実施減点は、「前方伸身宙返り5/2ひねり」+「前方かかえ込み宙返り 正面伏臥」の部分で中欠点（-0.3点）に該当するミスその他、着地のミスなど小欠点（-0.1点）に該当するミスを重ね合計で0.9点の減点となりB得点は9.10点という結果であった。

2. あん馬

表2は、全日本インカレで実施されたあん馬の実施技、加点、技数、演技価値点としてカウントさ

れる技の難度とその数、A得点、B得点、決定点を一覧にしたものである。

表2 あん馬の演技構成

演技順	技名						難度	RG	加点			
1	正交差						A	I				
2	正交差ひねり逆交差入れ						B	I				
3	正交差						-					
4	横向き旋回						A	II				
5	Eフロップ (SLLS)						E	IV				
6	Dコンバイン (LLR270°)						D	IV				
7	縦向き前移動 (馬端-把手-把手-馬端)						C	III				
8	縦向き後ろ移動 (あん馬馬背片手着手)						D	III				
9	縦向き前移動						A	III				
10	一把手上縦向き旋回						B	II				
11	下向き転向						B	IV				
12	シュテクリ B						B	IV				
終末技	シュテクリ A+倒立 1 回ひねり 3 部分移動下り						D	V				
難度	A	B	C	D	E	F	難度点	RG	加点	A得点	B得点	決定点
演技技数	3	4	1	3	1		2.9	2.5		5.4	8.70	14.100
カウント技数	1	4	1	3	1							

点)などを重ね1.3点の減点となりB得点は8.70点という結果であった。

3. つり輪

表3は、全日本インカレで実施されたつり輪の実施技、加点、技数、演技価値点としてカウントされる技の難度とその数、A得点、B得点、決定点を一覧にしたものである。

表3 つり輪の演技構成

演技順	技名						難度	RG	加点			
1	け上がり中水平支持						E	III				
2	け上がり十字懸垂						C	III				
3	後方け上がり支持						A	I				
4	脚前掌支持						A	IV				
5	屈腕伸身力倒立						B	IV				
6	前方車輪倒立						C	II				
7	前方車輪倒立経過						B	I				
8	前方屈身2回宙返り懸垂 (ジョナサン)						D	I				
9	前方かかえ込み2回宙返り懸垂 (ヤマワキ)						C	I				
10	後ろ振り上がり十字懸垂						C	III				
11	ほん転逆上がり倒立						C	II				
12	ほん転逆上がり倒立経過						B	I				
終末技	後方屈身2回宙返り1回ひねり下り						D	V				
難度	A	B	C	D	E	F	難度点	RG	加点	A得点	B得点	決定点
演技技数	2	3	5	2	1		3.2	2.5	0.0	5.7	8.90	14.600
カウント技数		2	5	2	1							

演技では、「Eフロップ」、「Dコンバイン」、「縦向き後ろ移動移動 (D難度)」など13の技を実施し演技価値点としてカウントされる10技の難度とその数は、難度の高い方から 1E 3D 1C 4B 1A となり難度点は2.9点となり、RGは、全てを満たしているので2.5点となる。

あん馬の演技においては、加点されることがないため、難度点、RGを合わせたA得点は5.4点という結果であった。

実施点は、落下や停止といった大欠点はなかったが、交差の大きさ、旋回の大きさなど演技全体としての欠点、個々の技での小欠点(-0.1

点、決定点を一覧にしたものである。

演技では、「け上がり中水平 (E難度)」、「ジョナサン (D難度)」、「後方伸身2回宙返り1回ひねり下り (D難度)」など13の技を実施し演技価値点としてカウントされる10技の難度とその数は、難度の高い方から 1E 2D 5C 2B となり難度点は3.2点となり、RGは、全てを満たしているため2.5点となる。

つり輪の演技においては、上昇局面で実施された力静止技の組み合わせに加点が与えられるが、この演技では加点に値する演技は見られなかったため加点は0.0点となり難度

点、RG、加点を合わせたA得点は5.7点という結果であった。

実施点は、停止といった大欠点はなかったが、力静止技の時間、リングの不必要な揺れなど個々の技での小欠点などを重ね1.1点の減点となりB得点は8.90点という結果であった。

表4 跳馬の演技構成

跳越技 No.	技 名	A 得点	B 得点	決定点
5.25	伸身ユルチェンコ 5/2 ひねり (シューフェルト)	6.6	9.45	16.050

4. 跳馬

表4は、全日本インカレで実施された跳馬の実施技と演技価値点であるA得点及びB得点、決定点を表にしたものである。

跳馬においては、グループVの「ロングド踏み切り技」に属する「伸身ユルチェンコ5/2ひねり」を実施し演技価値点であるA得点は6.6点を得ている。

実施点は、着地で一歩動いたが、規定の着地エリアに着地しひねり不足もなく、全体で0.55点の減点に抑えB得点は9.45点という結果であった。

5. 平行棒

表5 平行棒の演技構成

表5は、全日本インカレで実施された平行棒の実施技、技数、演技価値点としてカウントされる技の難度とその数、A得点、B得点、決定点を一覧にしたものである。

演技では、「バレー (E 難度)」、「棒下宙返り倒立 (D 難度)」、「懸垂前振り後方かかえ込み宙返り腕支持 (D 難度)」など16の技を実施し演技価値点としてカウントされる10技の難度とその数は、難度の高い方から1E 4D 5Cとなり難度点は3.6点となり、RGは、全てを満たしているため2.5点となる。

平行棒の演技においては、加点されることがないため、難度点、RGを合わせたA得点は6.1点という結果であった。

実施点は、「棒下宙返り倒立」の倒立位からのズレ、「バレー」や「懸垂前振り後方かかえ込み宙返

演技順	技 名	難度	RG	加点						
1	前振り上がり開脚抜き倒立	C	II							
2	棒下宙返り倒立	D	IV							
3	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り (バレー)	E	III							
4	前振り上がり支持	A	II							
5	逆倒立ひねり	A	I							
6	後方車輪倒立	C	III							
7	懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持	D	III							
8	前振り上がり支持	—								
9	正倒立ひねり	A	I							
10	支持前振り開脚抜き倒立	C	I							
11	前振りひねり倒立	C	I							
12	前振り片腕支持1回ひねり倒立	C	I							
13	前振り上がり支持	—								
14	前方開脚5/4宙返り腕支持	D	I							
15	前振り上がり支持	—								
終末技	後方屈身2回宙返り下り	D	V							
難 度	A B C D E F	難度点	RG	加点	A 得点	B 得点	決定点			
演技技数	3	5	4	1	3.6	2.5		6.1	9.05	15.150
カウント技数		5	4	1						

り腕支持」での終末局面における高さや姿勢による欠点が見られ0.95点の減点がありB得点は9.05点という結果であった。

6. 鉄棒

表6は、全日本インカレで実施された鉄棒の実施技、加点、技数、演技価値点としてカウントされる技の難度とその数、A得点、B得点、決定点を一覧にしたものである。

演技では、「コールマン(F難度)」、「コバチ(D難度)」、「後方伸身2回宙返り2回ひねり下り(E

表6 鉄棒の演技構成

演技順	技名	難度	RG	加点			
1	後ろ振り上がりひねり倒立	A	I				
2	後方車輪	A	I				
3	後方車輪	-					
4	コバチ	D	II				
5	後方車輪	-					
6	後方車輪	-					
7	コバチ1回ひねり(コールマン)	F	II				
8	後方車輪	-					
9	後方車輪	-					
10	後方とび車輪1回ひねり(クースト)	C	I				
11	後方とび車輪3/2ひねり片大逆手	C	I				
12	逆手持ち換え前方車輪	A	I				
13	エンドー1回ひねり大逆手	D	III				
14	大逆手エンドー	C	IV				
15	大逆手車輪	B	IV				
16	大逆手振り上がりとび逆手持ち換え	B	IV				
17	エンドー	B	III				
18	前方車輪ひねり倒立	A	I				
19	後方車輪	-					
20	後方車輪	-					
終末技	後方伸身2回宙返り2回ひねり下り	E	V				
難 度	A B C D E F	難度点	RG	加点	A得点	B得点	決定点
演技技数	4 3 3 2 1 1	3.3	2.5	0.0	5.9	9.30	15.200
カウント技数	3 3 2 1 1						

難度)」など技を実施し演技価値点としてカウントされる10技の難度とその数は、難度の高い方から1F 1E 2D 3C 3Bとなり難度点は3.3点となり、RGは、全てを満たしているので2.5点となる。

鉄棒の演技においては、手放し技とその前後の技の組合せによって加点が与えられるが、この演技では加点に値する演技は見られなかったため加点は0.0点となり、難度点、RG、加点を合わせたA得点は5.9点という結果であった。

実施点は、全体的には良い演技であったが、「コールマン」での終末局面の低さ、「エンドー1回ひねり大逆手」でのスピード感の喪失など欠点が見られ、0.70点の減点がありB得点は9.30点という結果であった。

IV 考察

1. ゆかの演技について

U.K選手の現在のゆかの演技におけるA得点は、難度の高い技の実施、組み合わせ加点の数など世界のトップクラスの位置にあると言える。報告(1)によると、2007年10月にデンマークのオーフスに

において開催された第39回世界体操競技選手権大会（以下、世界選手権という。）でのゆか全演技のA得点の最高は6.9点で、次が6.7点の演技でU.K選手と同じ得点であった。

B得点では、Ⅲ章1項で述べたとおり1節目のシリーズである「ロンダード+後方伸身宙返り3/2ひねり+前方伸身宙返り5/2ひねり+前方かかえ込み宙返り正面伏臥」で中欠点に相当するミスをしてしまい9.1点と言う結果であったが、技の正確さ、安定性を高めるトレーニングによってミスを克服しB得点を9.00点代中盤にまで引き上げられれば、得点は16.000点代に乗せられる。この得点は、上記世界選手権において十分メダルに届くものである。また、検証のためのDVD映像では、宙返り系の技などは表1とは違う構成で演技を実施していた。それだけ、ゆかにおける持ち技は豊富であり、バラエティーに富んだ演技構成の可能性も示唆される。

2. あん馬の演技について

あん馬の演技におけるA得点は、全日本インカレにおいては、表2のとおり5.4点という結果であったが、検証のためのDVD映像では5.5点という結果であった。これは、全日本インカレ時の演技で「縦向き前移動（馬端－把手－把手－馬端）（C難度）」を実施したのに対し代表決定競技会では「縦向き前移動（馬端－把手－馬背－把手－馬端）（D難度）」を実施した違いによるものであり、前者では意識的に難度を落とし演技に臨んだのか、あるいは演技中に失敗を回避するために咄嗟に技を変更したものと考えられる。

したがって、U.K選手の現時点でのA得点は5.5点の演技内容で構成されていると考えても良いだろう。しかし、世界選手権種目別上位8名のA得点は5.9～6.4点で構成されていることを考えると、演技価値点としてカウントされるA難度の技を無くし、「Dコンバイン」を「Eコンバイン」にまで引き上げ、最低でも2E3D2C3B（A得点=5.9点）となる演技を構成しなければならないだろう。

北京オリンピック以降のことを考えると、採点規則が改訂されることを考慮しなければならないが6.0～6.2点となるような演技構成が求められることになるだろう。

B得点では、特に大きな失敗はないが8.7点と低い。難度の高い技の実施における質の精度を上げることがもとより、閉脚旋回、交差の質（大きさ、スピード）を高める努力も必要で、減点は1.00点未満に抑えることが課題と言えよう。

3. つり輪の演技について

つり輪の演技におけるA得点は、全日本インカレにおいては、表3のとおり5.7点と世界の上位を狙うには低い得点と言える。世界選手権種目別上位8名のA得点は6.6～7.1点で構成されていて0.9～1.4点という大きな差があることが明らかである。U.K選手の演技構成でE難度が「け上がり中水平支持」だけというのはいかにも寂しい限りで、「後ろ振り上がり中水平支持（E難度）」、「伸腕伸身逆上がり十字懸垂（D難度）」、「背面水平懸垂経過十字懸垂（D難度）」などを構成の中により多く取り入れることが求められる。

現行の採点規則ではグループⅢの「振動から力静止技」にある難度の高い技をどれだけ実施するかによって演技価値点が大きく左右されることから、体力強化を含めトレーニングによって課題を克服していくしかないであろう。

また、現時点では組み合わせ加点が0.0点であることもA得点が低い要因となっていることから、今以上に体力強化を図り、加点を得られる構成を考えていかねばならないだろう。

以上のことから、世界を狙うU.K選手のA得点は、6.0～6.4点とすることが当面の、そして緊急の課題と言えよう。

B得点では、特に大きな失敗はないが8.9点と低い。つり輪の不必要な揺れや振動系の技における倒立位からのズレなど細かな欠点を少しでも減らす努力が必要で、その努力を保障するためにも体力強化は欠かせない。

4. 跳馬の演技構成について

跳馬の演技は、1演技1技という種目特性を持っていることから、一つひとつの技にA得点に当たる演技価値点が与えられている。U.K選手が実施した「伸身ユルチェンコ5/2ひねり(シューフェルト)」には6.6点の価値点、つまりA得点が与えられている。現行の採点規則が運用された当初は6.8点が与えられていたが、通達(6)によりA得点が既述のように変更された。跳馬において最も高い価値点を持つ技には7.0点が与えられていることから、U.K選手には7.0点の技を実施することが今後の課題と言える。

B得点では、第一空中局面、第二空中局面(注3)、着地(ルール上の着地エリアを含む)で大きな乱れはなく9.45点という高得点を得ている。7.0点の技を実施した際にも同様に高得点を得られるように意識したトレーニングが求められる。

5. 平行棒の演技について

平行棒の演技におけるA得点は、全日本インカレにおいては、表5のとおり6.1点という結果であったが、世界選手権種目別上位8名のA得点は6.2～6.6点で構成されていることから世界の上位を狙うには現時点より0.2～0.4点位の引き上げが必要であろう。例えば、演技構成上実施する技の順番が変わることがあり得るが、全日本インカレ時の演技構成の中で「後方車輪倒立(C難度)」に変えて「懸垂前振り後方屈身2回宙返り(屈身バーレ)(F難度)」を実施すれば1E 4D 5Cであった難度を1F 1E 4D 4Cの難度にすることができ、難度点も0.3点の引き上げとなりA得点は、6.4点となる。既に「懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り(バーレ)(E難度)」を演技構成に入れていることから考えると現実的な構成と言えるだろう。

また、採点規則上特に問題がある訳ではないが、難度が高く腕支持で終末局面を迎える技が多いからか、その後の繋ぎの技として「前振り上がり支持(A難度)」、棒上での「倒立ひねり(A難度)」が多いように感じられる。構成上、繋ぎの技を挟まずに難度の高い技を連続して実施する工夫が今後必要に思われる。

B得点は、全日本インカレにおいて9.05点という得点であったが、「棒下宙返り倒立(D難度)」の正確な実施や腕支持で終末局面を迎える技を実施した際の終末局面の窮屈な姿勢を改善することで9.00点代中盤にまで引き上げられる可能性は十分にあることからこれからのトレーニングに期待したい。

6. 鉄棒の演技について

鉄棒の演技におけるA得点は、全日本インカレにおいては、表6のとおり5.9点という結果であったが、世界トップクラスの選手とは0.2～0.6点の差がある。構成に含まれる技の一つひとつは世界トップクラスの選手たちと大差は無いように思われるが、演技価値点としてカウントされるB難度の技を減らし、C難度以上の技を2つ以上増やすことで6.0点代にまで引き上げるトレーニングが必要であろう。

B得点では、一つひとつの技について姿勢的、技術的に意識された良い演技として印象づける工夫も感じられ特に問題となることはないが、より良い実施を目指し9.50点以上の得点が得られるトレーニングが必要であろう。

V まとめ

本研究は、北京オリンピックにおいても有力な候補選手であり、それ以後も日本のエースとして活躍が予想される若い選手に注目し、現行の採点規則に沿った形で現在の演技構成を分析することで日本選手の可能性を探り、今後の強化策の一助とすることを目的とした。

その結果、男子体操競技6種目中ゆかの演技においては、既に世界のトップクラスに肩を並べるレベルにあり、実施面で安定した演技に仕上げることでメダルを狙える位置にいることが明らかとなった。あん馬、跳馬、平行棒、鉄棒の演技においては、若干難度を引き上げ、実施面においても姿勢的、技術的に意識し安定した演技を心掛ける必要があること、また、つり輪の演技においては、世界の選手と比較すると、現時点でA得点には大きな差があることが明らかとなり、その差を少しでも縮めることが重要であると考えられた。そのため、演技価値点としてカウントされる技の難度を上げつつ安定した演技を実現させるためにも体力強化を含めたトレーニングが必須の課題であることが明らかとなった。

現行の2006年版男子採点規則は、北京オリンピック以後に改訂が行われ、新たに2012年第30回オリンピックロンドン大会に向けた2009年版採点規則が運用されることになる。新採点規則では各種目それぞれで若干難度の見直しがされることが予想される、しかしその基本的な運用の仕方は現行の採点規則に準じたものになるだろう。したがって、U.K選手においては、北京オリンピック以後のトレーニング課題は上述のとおり変わることはないだろう。

現在、日本の体操競技界ではU.K選手はじめ年齢的に彼の前後にいる若い選手たちが着実に力(競技力)をつけてきている。北京オリンピック以後、日本が世界のトップレベルを維持するためにも彼らの活躍は欠かせない。そのために、U.K選手以外の若い選手たちにおいても早期に課題を見出し長期的な視野に立った育成・強化の体制が望まれる(注4)。

謝辞

研究のための演技構成表を作成するにあたり筆者が、技の難度および実施された技について解説しきれなかった部分を、財)日本体操協会審判員会体操競技男子部副部長である後藤洋一氏に解説をして頂いた。忙しい最中の突然の依頼に対し快くかつ迅速に対応して頂いたことに感謝するとともに改めて後藤洋一氏に対し謝意を表す。

●注

注1

JOCでは、北京オリンピックを前に様々な事前調査を行っているが、「大気汚染は確実に存在する」とし「北京五輪に向けた大気汚染対策の予行演習として、大規模な交通規制が始まった北京で、日本オリンピック委員会（JOC）の情報医科学専門委員会が17日、1年後の本番に向けた情報収集として、粉じん、一酸化炭素などの測定を実施した。……中略……。専門委は帰国後、〈1〉大気汚染に慣れないので直前まで現地に入らない〈2〉外出の際は高性能の防じんマスクを着用する——をJOCに提言する予定だ。」と報告している。（2007年8月18日 読売新聞）

注2

得点の算出の仕方は、2006年版男子採点規則または稚内北星学園大学紀要 第7号 2007⁽⁸⁾を参照されたい。

注3

第一局面は、「踏み切り～（跳馬への）着手」、第二局面は、「着手～着地」までを指し、B審判員はそれぞれの局面における姿勢的、技術的欠点及び着地における着地位置、不必要な歩数を採点規則に沿って採点を行う。

注4

2007年12月に「U-21・大学1年生選抜強化合宿」が初めて行われた。この合宿は「ナショナル強化への一貫性を理念に」（日本体操協会公式サイト 2007）行われたもので、日本体操協会が長期的な視野に立った育成・強化へ向けた体制づくりへの第一歩と言え意義のある事業として評価できる。このような事業が永続的に実施され、選手の育成・強化へ向けた大切な事業として確立されていくことを期待したい。

●引用・参考文献

- (1) 遠藤幸一：第39回世界体操競技選手権大会報告，研究部報 第98号，pp.1-26，日本体操協会体操競技委員会研究部，2007
- (2) 財）日本体操協会：2006年版 男子採点規則 第2版，2006
- (3) 財）日本体操協会，他：男子体操競技情報12号，2006
- (4) 財）日本体操協会，他：男子体操競技情報13号，2007
- (5) 財）日本体操協会，他：男子体操競技情報14号，2007
- (6) 財）日本体操協会，他：体操競技男子，跳馬Aスコアに関する通達，2006
- (7) 審判委員会体操競技男子部 他：採点規則追加情報 跳馬跳越技Aスコア変更について，2006
- (8) 岡崎秀人：男子体操球技の演技構成－ゆかを例として－，稚内北星学園大学紀要，第7号，2007

●参考メディア

読売新聞：WEB版，2007.8.18 <http://www.yomiuri.co.jp/>

原田睦巳：U-21・大学1年生選抜強化合宿レポート，財）日本体操協会公式WEBサイト2007

<http://www.jpn-gym.or.jp/artistic/2007/report/data/07mu21camp.html>

財）日本体操協会：第46回NHK杯 兼 第40回世界体操競技選手権大会日本代表決定競技会 兼 第24回ユニバーシアード競技大会日本代表決定競技会 DVD 2日目

●英文タイトル

Post-Beijing 2008 Young Japanese Men's Gymnast

●要約

The purpose of this study is to investigate and evaluate the possibilities of Japanese gymnasts' competence of post-Beijing 2008, through analyzing the performance of a young male gymnast who should become a leading athlete in the future Japanese gymnastics.

The following results became clear.

First, his Floor Exercise composition is already at a level of a top-class in the world.

Secondly, in order to compete with top-level players, his compositions of Pommel horse, Vault, Parallel bars and Horizontal bar must show a slight increase in A-scores elements (0.2-0.6 points) and also it is necessary to keep a stable performance for both postural and technical points.

Next, there is a wide gap between his Rings performance from those of top-class competitors, especially for A-score elements. He must increase them at about 1.0-1.3 points and should also train more to strengthen his physical abilities.

For younger athletes, it is important to specify their problems at an early stage and to foster and train them in the long-term point of view.

